

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二演舞場B二
電話 三五四一―五四七一番

清元協会

世田谷区桜ヶ丘四ノ九ノ十八
電話 三七〇六―九五二七番

財団法人 古曲会

中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館
電話 三五七一―〇二一六番

新宿区大久保二の二三の二
電話 三三〇〇―四六五三番

港区南青山五ノ十三ノ三
電話 三四〇七―七四五三番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四
電話 三五四二―六五四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二ノ十五ノ十二ノ四〇三
電話 三五八五―九九一六番
(五十音順)

後援 東京都

後援 東京都

平成八年三月九日(土)

朝日生命ホール

第一部 正午開演
第二部 午後四時開演

三時半終演
七時半終演

'96 都民芸術フェスティバル

第二十六回 邦楽演奏会

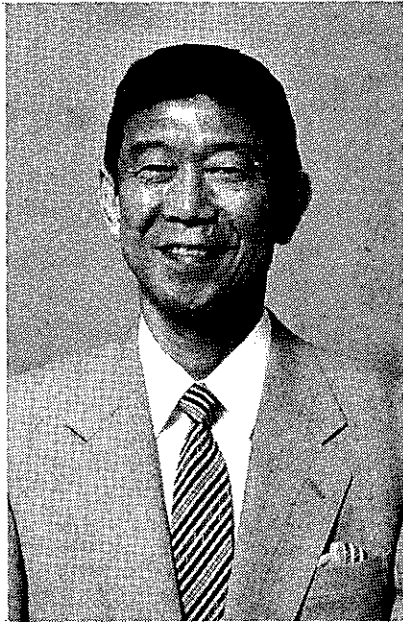
— 邦楽名曲選 —

'96都民芸術フェスティバル公演計画一覧

分野	種目	演目	期日・会場	入場料金	問い合わせ先
音	オペラ	プッチーニ作曲「トスカ」 (藤原歌劇団)	2/7・2/9・2/11 東京文化会館大ホール	20,000~2,000円	(財)日本オペラ振興会 ☎5466-3185
		ビゼー作曲「カルメン」 (二期会オペラ振興会)	2/24・2/25・2/26 東京文化会館大ホール	13,000~2,000円	(財)二期会オペラ振興会 ☎3796-4711
		シューベルトの恋 (日本オペレッタ協会)	3/5~3/10 日暮里サニーホール	8,000~4,000円	(財)日本オペレッタ協会 ☎3479-1535
楽	オーケストラ	オーケストラ・シリーズ No27	1/17・1/28・2/5・2/16 2/22・3/5・3/9・3/15 3/23 東京芸術劇場 東京文化会館	3,500~1,500円 A席9公演分 セット券 25,000円	(社)日本演奏連盟 ☎3437-6837
		ポピュラー	永遠のラテン名曲集	3/6 よみうりホール	2,500円 (社)日本音楽家協会 ☎3585-3903
		シャンソン ハイライト'96	3/7 よみうりホール		
		スタンダードをあなたに~ジャズ~	3/8 よみうりホール		
邦楽	第26回邦楽演奏会	3/9 新宿朝日生命ホール	1,500円	日本三曲協会 ☎3585-9916	
演	現代演劇	福田善之作 「夢、ハムレットの」	3/18~3/30 俳優座劇場	指定席 5,000円	木山事務所 ☎3443-0886 (社)日本劇団協議会 ☎3341-8154
		児童・青少年演劇 「稽古場」(けいこば) 僕の「はてしない物語」 ミハエル=エンデ原作	2/24~3/3 東京芸術劇場中ホール	当日 3,500円 前売 3,000円 団体割引 2,500円 無料招待あり	日本児童・青少年演劇協議会 ☎5376-3671
舞	バレエ	「眠れる森の美女」	2/14・2/15・2/16 東京文化会館大ホール	10,000~2,000円 無料招待あり	(社)日本バレエ協会 ☎3499-5524
		東京シティ・バレエ団 「コッペリア」	1/27・1/28・1/29 東京文化会館大ホール	8,000~3,000円	東京シティ・バレエ団 ☎0424-85-2915
		スターダンサーズ・バレエ団 ピーター・ライト版「ジゼル」	3/14・3/15・3/16 東京文化会館大ホール	4,000~2,000円 無料招待あり	(財)スターダンサーズ・バレエ団 ☎3401-2293
	現代舞踊	「名月安達が原鬼女異聞」 「トンネル」 「H O M E」	3/6・3/7 東京文化会館大ホール	4,000~2,000円 無料招待あり	(社)現代舞踊協会 ☎3400-4544
日本舞踊	第39回日本舞踊協会公演	2/13・2/14・2/15 国立劇場大劇場	5,000円 無料招待あり	(社)日本舞踊協会 ☎3533-6455	
古典芸能	能	能および狂言	都民能 3番 式能 10番	1/20 国立能楽堂 2/18 国立能楽堂	3,000円 6,000円 (社)能楽協会 ☎3574-6441
		民俗芸能	第27回 東京都民俗芸能大会	3/30・3/31 東京芸術劇場中ホール	無料招待 東京都民族芸能大会実行委員会事務局 ☎5978-3651
	寄席芸能	第26回 都民寄席	2/12~3/29 八王子市民会館他6会場	無料招待 都民寄席実行委員会事務局 ☎3833-8622	
4分野	12種目	83公演	14会場		

○これらの個々の公演の詳細に関するお問い合わせは、各団体へ、都民芸術フェスティバル全般にわたる問い合わせは、東京都教育庁生涯学習部文化課(電話 ダイヤルイン 5320-6861)へお願いします。

'96 都民芸術フェスティバルに寄せて



東京都知事 青島 幸男

今年もまた、ファンの方々が心待ちにしている「都民フェスティバル」のシーズンとなりました。

この催しは、へすぐれた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へをキャッチフレーズに、東京都が芸術文化団体の公演を助成することにより、

より多くの都民の皆さんに、最高の舞台芸術を鑑賞していただけるよう実施しているものです。皆さんの熱いご支持と舞台を創られる方々の意欲的な取組に支えられ、東京の初春を飾る多彩な文化行事として、今回で28回目を迎えることができました。大変喜ばしく思っています。

今や芸術文化は、私たちがのびやかに暮らすうえで欠くことのできない、いわば生活の必需品です。都内において芸術文化活動が盛んに繰り広げられることは、東京の活力や創造力を表すものとして、また都市の生活にうるおいを与えるものとして、誠に意義深いものと考えています。

東京都では、今後とも日本を代表する舞台芸術公演への支援を行い、これらの芸術活動を都民の皆さんが身近に楽しむことができるよう、「都民芸術フェスティバル」をはじめとする文化事業の充実、発展に努めてまいります。

このフェスティバルに参加され、東京都の芸術文化事業にご協力いただいている邦楽連合会の皆様に、厚くお礼を申し上げますとともに、公演のご成功と今後ますますのご活躍を期待いたします。

第一部 番組 (十二時開演)

一、箏曲秋風

同 同 同 同 同 箏
 荒 杉 高 岸 藤 藤
 卷 本 羽 辺 井 井
 彩 禧 洋 美 百 千
 由 代 賀 賀 代 代
 賀 賀 賀 賀 賀 賀

二、宮菌道行歌の中山

同 淨瑠璃 宮 菌 千 和 惠
 宮 菌 千 和 惠
 同 三味線 宮 菌 千 湖 波

三、新内若木仇名草(蘭蝶)

淨瑠璃 富士松 魯 遊
 三味線 新 内 仲 三
 上調子 新 内 勝 史 郎

四、清元しめろ 能やれ 色いろの 相かけ 図ごえ (神田祭)

同	同	同	同	淨瑠璃	清元	延千宗	三味線	清元	延千八寿
同	同	清元	清元	清元	清元	延千宗	清元	清元	延千八寿
同	清元	延洲寿代	延洲寿代	延洲寿代	延洲寿代	延洲寿代	清元	清元	延千八寿
同	清元	延千惠香	延千惠香	延千惠香	延千惠香	延千惠香	清元	清元	延千八寿
同	清元	延八千代	延八千代	延八千代	延八千代	延八千代	上調子	清元	延秀喜之

五、義太夫 壺坂つほさか 観音かんおん 靈驗れいげん 記き

— 沢市内の段 —

淨瑠璃	竹本越道
三味線	豐澤源平

六、常磐津 三世さんせ 相錦さうしん 文錦ぶんしん 文章ぶんしやう

同	同	同	淨瑠璃	常磐津	文字太夫	三味線	常磐津	東啓蔵
同	同	同	常磐津	常磐津	駒太夫	同	常磐津	同
同	同	同	常磐津	常磐津	光勢太夫	上調子	常磐津	東啓蔵
同	同	同	常磐津	常磐津	和光太夫	同	常磐津	東啓蔵

七、長唄 渡辺わたなべ 綱つな 館やかた の 段だん (網館あなやかた)

同	同	同	同	同	同	同	同	同
松永兵衛	松永忠次郎	松永鉄次郎	松永鉄次郎	松永鉄次郎	松永忠次郎	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同

第二部 番組 (午後四時開演)

一、箏曲八はち

同 箏替手 段だん の 調しらべ
 米川裕敏 枝子

同 同 同 同 同 同 同 箏本手
 大岡高富柴清辻米
 学崎木永崎水本川
 敏敏敏親親親親ま
 悠優花喜輝美代み

二、萩江高たか

同 同 同 唄 尾お 懺さん 悔げ
 萩江おめ香ち 江江江江 江江江江
 同 同 三味線
 萩江江 八都千 理代世

三、義太夫新しん

久お母お久 版ばん 歌うた 祭さい 文もん | 野崎村の段 |
 松染光作 竹竹竹竹 本本本本 越綾土朝素 孝一恵重八
 // // // ツ 三味線
 鶴鶴鶴鶴鶴 澤澤澤澤澤 紋寿津三津 々々賀寿賀 榮香榮々寿

歌詞と解説(演奏順)

解説 竹内道敬

第一部

一、箏曲秋風の曲

高向山人(蒔田雁門)作詞、光崎検校作曲。箏曲新組歌。俗に天保組ともいう。天保八年(一八三七)刊『箏曲秘譜』に初めて見える。白楽天の『長恨歌』を翻案したもので、六歌からなる。

一、二歌は楊貴妃が玄宗皇帝に召されて寵愛をうけたこと、三、四歌は安祿山の乱のために都を追われ、馬嵬の地で楊貴妃が殺されたこと、五、六歌は楊貴妃亡きあとの玄宗の悲しみ、というように二歌ずつひとまとめになっている。全体は序破急の構成で、しかも六歌による組歌形式になっている。調弦は秋風調子。

二、宮園道行歌の中山

小さん金五郎の心中事件が起きたのは、元禄十三年(一七〇〇)のことという。大阪の歌舞伎俳優の金屋金五郎と湯女の額の小さんは、なじみを重ねたが、お定まりの金につまんで心中。小さんは病気がちであったともいうが、詳しいことはわからない。しかし事件は歌祭文になり、また浄瑠璃や芝居にもなったが、最近では上演されることがなくなった。しかしその浄瑠璃の古い本があったので、それを昭和三十六年に編集・作曲したもの。十月、藤間勘十郎の会で初演された。内容は小さん金五郎の心中道行。

三、新内若木仇名草(蘭蝶)

初代鶴賀若狭掾作詞・作曲。安永(一七七二―八一)の末ごろの作品であろう。全曲を演奏すると一時間半ほどかかる大曲。

市川屋蘭蝶という浮世声色身振師は、榎屋の此糸となじみを重ねて、女房お宮が身を売った金まで入れ揚げてしまう。お宮は此糸を訪ねて逢い、蘭蝶と縁を切ってくれと頼む。此糸はそれを承知したが、しかし結局蘭蝶と此糸は、お宮の願いもむなしく心中してしまふ。

天涯孤独で、頼りになる男のいない此糸、夫に尽くすお宮、その二人の間でどうにもならない蘭蝶。貧しい庶民のぎりぎりの暮らしのなかでの男女の関係は、いつの世も変わりが無い。やさしい言葉がかけられて嬉しかった此糸のクドキ「四谷で初めて」、お宮の血を吐くようなクドキ「縁でこそあれ」が双璧で、とくに後者は新内節の代名詞にもなっている。本曲と「明烏」「伊太八」を新内節の三大名作という。

今日はその長い物語から、お宮のクドキとその後を聞いていただくことになっている。

四、清元 能色相 凶（神田祭）

天保十年（一八三九）九月、江戸河原崎座初演。三升屋二三治作詞、清元齋兵衛作曲。江戸の神田祭を背景に、芸者と鳶の頭の当世風の恋の鞘当てを見せたもの。

江戸の天下祭は九月の神田祭と六月の山王祭が一年交代で、本祭と陰祭を行っていた。西暦でいうと奇数年が神田祭、偶数年が山王祭で、江戸の町々から山車が出て、豪勢さを競った。リオのカーニバルを想像してもいいほどであった。あまりに贅沢だったので、天保十二年からは制限が加えられ、縮少された。その最後の賑やかで豪華な祭を背景にした、江戸っ子の気分がいっぱいである。

このあとの常磐津「三社祭」とくらべてお聞きいただくと、時代の違い、清元と常磐津の違いなど、いろいろとお楽しみいただけると思う。

五、義太夫 壺坂観音霊験記 —— 沢市内の段 ——

明治新作浄瑠璃。福地桜痴（一説に伊東椿増）が作ったという浄瑠璃に、二世豊沢団平の妻千賀が加筆してできた。二世豊沢団平作曲。明治十二年（一八七九）十月、大阪大江橋座で初演されたが、その後作曲者が改曲、明治二十年稲荷彦六座で三世大隅太夫と上演した。翌年には歌舞伎化もされ、人気曲となった。なかでもお里のクドキ「三つ違いの兄さんと…」以下はとくに知られている。ちなみにこの壺坂寺も、この浄瑠璃の評判が高くなるのにつれて、参詣する人も多くなったという。

癒瘡のために盲目になった座頭の沢市は、壺坂寺のほとり土佐町に妻のお里と暮らしている。沢市は琴や三味線の稽古、お里は洗濯や針仕事で細々と生計を立てている。貧しいが幸せな毎日のだが、気にかかることがある。それは夫婦になってから三年たつのに、その間お里は毎晩七つ（午前四時ごろ）になると、どこかへ出かけるのである。問い詰められてお里は、沢市の目が見えるようにと、壺坂寺へ裸足参りの祈願をしていたのであった。

貧しいなかにも夫婦が寄り添って、幸せな生活を送っているようす、そして夫を思う妻の心の美しさ、そんな味がしみじみと感じられる。

三世相錦繡文章

六、常磐津 二社祭祀の段

「三世相錦繡文章」は安政二年（一八五五）五月、常磐津家元のおさらい会で初演。三世桜田治助作詞、四世岸沢古式部作曲。のち安政四年七月、中村座の二番目狂言として興行・初演された。お園六三郎を主人公にしたもので、全六幕すべてが常磐津出語りで人気を博したが、その結果、家元豊後大掾と作曲者古式部との間で功名争いが起きて、常磐津と岸沢の二派に分裂する原因になった。

小倉の色紙を探す小柴六三郎との間に子までなしたかしくは、今はお園と名を変えて福島屋にいる。

そこでいろいろあつてお園は子供を殺され、兄を殺してしまふ。お園と六三郎は死んで十萬億土から地獄、極楽をさまよい、小倉の色紙のありかを知る。実はこれがすべて二人が同時に見た夢で、三社祭の石橋の山車の中から小倉の色紙を取り出し、すべてはめでたく納まる。

とくに今日の場面は、変化もあり、また江戸の祭祀の気分がいっぱい、清元の「神田祭」と比較して聞いていただくと、常磐津と清元の違いや、時代による違いもおわかりいただけだと思う。

七、長唄 渡辺綱館の段（綱館）

明治二年（一八六九）開曲。作詞者未詳。三世杵屋勘五郎作曲。これはもと寛保元年（一七四一）に上演された「兵四阿屋造」の大薩摩を復活したものである。内容が劇的で、わかりやすい。

頼光四天王の一人渡辺綱は、羅生門で鬼の腕を切り取ったが、安倍晴明のすすめによって、七日の物思みをしている。そこへ故郷の津の国渡辺の里から、はるばると伯母が訪ねてくる。いったんは物思み中だからと断ったが、門の外でかき口説くので、やむなく門の内へ入れる。やがて伯母は、切り取った鬼の腕を見せてほしいというので、唐櫃の蓋を開けると、じっと見ていた伯母は腕をつかみ、鬼の正体をあらわし、茨城童子と名乗り、虚空へ消え失せてしまふまで。

大薩摩の代表曲で、作曲者も会心の作といっていたという。筋の運びもよく、聞いていてまことに楽しめる長唄である。

第二部

八橋検校作曲

一、箏曲八段の調

八橋検校の作曲作品では「六段の調」と「乱れ」が有名であるが、この「八段の調」も彼の作曲とされている（別に倉橋検校作曲という説もある）。宝暦五年（一七五五）刊の『撫箏雅譜集』に「八段之調子」として初めて曲名が見える。別名「八段」とも「八段すががき」ともいう。

名前通り八つの段から成り、初段のみ五五拍子で以下各段五二拍子。平調子。早くから三味線でも演奏され、尺八を加えた三曲合奏もおこなわれているが、今日は箏曲の本手替手での合奏をお聞かせする。

二、萩江高尾懺悔

もとは長唄「高尾懺悔の段」。延享元年（一七四四）春、市村座で初演された。傾城高尾の亡霊があらわれ、過ぎし日の思い出と地獄の責め苦を物語るという浅間ものの趣向。それを少し省略して萩江に移したものが、その時期は明治初期という説もある。

高尾というのは江戸吉原三浦屋の抱えの遊女で、七代あるいは十一代あったという。もっとも有名なのが二代目高尾で、仙台藩主伊達綱宗に請け出され、いわゆる伊達騒動の原因の一つとなった。いろいろな伝説が生れ、のちには芝居にもなり、隅田川で間夫のために吊るし斬りになるといのが見せ場になった。その二代目の墓があるのが土手の道哲こと浅草の西方寺で、のちには高尾の間夫、あ

るいはその恋敵として活躍する。もと西方寺の門前は処刑場で、その罪人のために道哲という道心が念仏をあげていたので、西方寺は土手の道哲といわれるようになった。

なお「さんげ」というのは仏教のことばで、過去の罪悪を悟って悔い改めることをいう。「さんげ」というのはキリスト教で罪悪を自覚し、これを悔いて告白することである。ここは「さんげ」が正しい。

三、義太夫新版歌祭文——野崎村の段——

安永九年（一七九〇）九月、大阪竹本座で初演された。近松半二作。お染久松の心中を主題にした「袂の白絞」「染模様妹背門松」から登場人物、ストーリー、有名な文句までそのまま借りて、お染久松ものの決定版となっている。なかでも野崎村の段はとくに有名で、歌舞伎でもよく上演されている。

油屋の丁稚久松は、集金した金を偽金とすりかえられ、野崎村の養父久作のもとへ返される。ここには重病で目の見えなくなった久作の後妻と、その連れ子のお光があり、久作は久松とお光を夫婦にしようと思っていた。その久松が帰ってきたので、お光は嬉しくてしかたがない。そこへ久松とは恋仲のお染があとを追って訪ねてくる。二人が心中もしかねないと知った久作は、意見をして別れることを納得させ、祝言にしようとお光を呼ぶ。がお光は事情を悟り、尼姿になって出てくる。油屋の後家も外で様子を聞いていて、お光に感謝し、世間の目もあるので、久松は駕籠で、お光母子は船に乗り、大阪へ帰って行く。

四、新内明烏夢泡雪(雪責め)

初代鶴賀若狭掾作詞・作曲。安永元年(一七七二)の作という。ふつう上下に分け、上を「浦里部屋」下を「雪責め」とする。

春日屋時次郎は、山名屋の浦里となじみを重ね、借金で首がまわらなくなり、死のうと思ひ、浦里の部屋に隠れていたが、遣手に見つかり、浦里は亭主に引き立てられ、時次郎は表へ放り出されてしまふ(ここまでが浦里部屋)。雪の降る山名屋の中庭で、浦里とかむろのみどりは古木に縛られ、亭主に折檻される。隣の二階からは三下りのメリヤスが聞こえてくる。二人が嘆いているところへ、屋根伝いに時次郎が助けにくるが、これはすべて夢であった。

全曲を演奏すると一時間半以上かかる大曲だが、今日は下の雪責めを聞いていただく。降りしきる雪、黒板塀、松の古木、そこに縛られた派手な衣装の遊女浦里とかむろのみどり、聞こえてくるメリヤス。場面を想像するだけでも色彩感覚にあふれている。本曲と「蘭蝶」、「伊太八」を新内節の三大名作という。

五、常磐津 戎詣恋釣針(釣女)

明治十六年(一八八三)、十二、花柳寿寿輔のおさらい会で初演された。河竹黙阿弥作詞、六世岸沢古式部作曲。その後竹柴晋作が加筆して、明治三十四年七月に、しばらく分裂していた常磐津、

岸沢が和解した時の披露曲として東京座で初演された。狂言「釣針」を脚色した松羽目もので、おおらかな楽しい語り物になっている。

妻のない大名と太郎冠者が、西の宮の恵比寿三郎殿に妻を申し受けようと出かける。道行があり、参拝して通夜すると、二人とも同じ霊夢を見る。落ちていた釣針で、まず大名が妻を釣ると、美しい上臈を釣り上げて祝言になる。それを見ていた太郎冠者も、一生懸命に釣り上げて、顔を見るとこれがすごい醜女であったという筋。

夫婦の縁が不思議なものであることは、誰でも知っている。この縁は神様の決めたことで、人知の及ぶところではない。現在の考え方は、神様をお願いして妻を決めるなどというのは、おかしいかも知れないが、妻をお願いする「申し妻」、子供を願う「申し子」などというのは、つい最近まであった。

六、清元梅柳中宵月(十六夜)

安政六年(一八五九)二月、江戸市村座の「小袖曾我薊色縫」の一番目四立目の所作事浄瑠璃として初演された。二世河竹新七(のちの黙阿弥)作詞、清元徳兵衛作曲。一説に清元お葉、あるいは二世延寿太夫の妻おいその作曲。

鎌倉極楽寺の所化(修業僧)清心は、女犯の罪と祀堂金を使い込んだ罪を着せられ、追放されて稲瀬川まで来る。そこへ廓を抜けてきた十六夜と出あう。十六夜はどこへでも連れて逃げてくれと頼む

が、清心はそれを断り、京都へ上って修業したいという。あきらめた十六夜は身を投げて死のうとする。きけば清心の子を宿しているという。行き場のなくなった二人は、一緒に川に飛び込むまで。このあと二人は別々に命が助かり、数奇な運命にもあそばされ、やがてふたたび逢うのだが、清心は二人が身を投げるまでである。

七、長唄石 橋

一般には文政三年（一八二〇）に四世杵屋三郎助（のち十世六左衛門）が作曲したと伝えるが、天保元年（一八三〇）開曲とする正本もある。元禄年間（一六八八―一七〇四）に薩摩外記が「外記節石橋」を作曲したが、廃曲になっていたのを、古正本をもとに新たに作曲したもの。

大江の定基が出家して寂昭法師となり、唐に渡って文殊の浄土清涼山のふもとに着く。そこへ木樵がやってきたので、この橋は石橋かと問うと、そうだが、誰でもたやすく渡ることはできない。高僧貴僧といわれた人でも、難行苦行をかさねた末でなければ無理であるという。そこで、この橋のいわれをもっと詳しく話してくださいと頼むと、橋のすばらしさと、そこで獅子が舞い遊ぶさまを話してくれた。

獅子というのは中国で考えられた空想の動物で、同じものに龍、麒麟、鳳凰、狸々などがある。日本に入ってきてからは、能をはじめとして、芸能では獅子の狂いを主題にするようになり、めでたい象徴としてよろこばれている。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそおでかけ下さりまして、ありがとうございました。何かと不行き届きの点もございましたが、お許しを願ひまして、どうかごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願いを申し上げます。

今までは、このようにしてまとめて御観賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますように、お願い申し上げます。

来年もここ新宿の朝日生命ホールで、三月八日（土）に開催する予定でございます。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願い申し上げます。

ありがとうございました。